世間法と仏法

火の車に乘り、短銃の的となり、水を變じて色紙となし、卵を瞬く間に親鳥と化す、其の奇や妙と言ふべく、若し夫れ、光芒閃々たる刀劒を、呑吐するが如きに至つては、見る者誰乎慄然たらざらん耶、世之を行ふものを名けて手品師といふ

虚言を吐く者を俗に「嘘八百」と稱し、怪我に實を傳ふるものを「千三つ」と名く、而して米國にては、虚言を吐くものを、手品師中の手品師と呼ぶ、何とな

れば、虚言を吐くものは、社會より、己れの全身を、己れの口中へ、自ら嚥み乾す者にして、世に更に巧妙なる手品師なければなり

我國にては俚諺にも「人を見れば泥坊と思へ」「虚言も方便」と云へるが、米國にも之に類したる俚諺あり「虚言を吐けば泥坊なり」と、試みに兩者を比較せんか、彼我倫理思想の差の如何を知るに足らん

拙堂和尚の歌に

八百の嘘を上手にならべても
誠一つにかなはざりけり

運動屋

學生々徒にして、學問を餘所にし、體育に害ある程、過度に、浮身を俏して運動に耽る、名けて運動家と呼ぶ、選擧に際して、東奔西走するもの、亦運動屋なり、其の他、己れの腹を肥やさんと欲して運動し、地位を得んが爲に運動する所謂運動家、擧げ來れば其の數甚だ尠からず

就中顯著なるものを、經濟界に於て、經濟の理法に從つて、商工業を營まんとはせず、唯贈賄收賄てふ

運動を之れ事とする、商工業會社と商號を掲げたる、贈賄收賄の運動屋なりとす

この種の商工業會社に於て、大に用ひられんと欲せば、倫理及經濟思想の多寡よりも、寧ろ巧妙なる運動屋の骨なるものを會得せることを要す、這般の消息に通ぜざらん乎、其の人格如何に崇高にして、其の經濟思想如何に豐富なるものなりとも、この種の商工業會社の蔓延跋扈せる社會に於ては、正に低能兒に非ずんば無能者なり、矛盾、顚倒の極と謂ふべく、而してこの種の運動屋の歡迎さるゝ間は、其の社會は、病的

なり不具なり、既に病的なり不具なり、其の治療を措て、其の社會の健全なる發達を期する、恰も二階から目藥の觀なき能はず、グレシアムの法則には、「惡貨は良貨を驅逐す」と云へり、赤痢、虎列刺の如き一時的惡疫の、流行するにだに、狼狽し、焦慮百方、警戒しつゝある官民、白晝大道を濶歩せる、我經濟界のこれ等の黴菌を如何にして驅除せんとする乎

取締役監査役

株式會社の機關を、一株主總會、二取締役、三監査役とす、取締役は、會社を代表して、其の業務を執行し、監査役は、會社財産の管理及業務の執行につき、取締役を監督す、而して商法第百八十四條には、監査役は、取締役又は支配人を兼ぬることを得ず、と規定せり

取締役、監査役を俗に重役と稱し、法律の規定する所によれば、一は監督者たり、一は被監督者たれど

も、實際は兩者、情意投合、利害を一にし、一擧一動有耶無耶の間に互に納得し、株主及び取引者の利害の如何よりは、寧ろその多くは、常に己れの利害を計ることに之れ汲々たり

かくの如きは、畢竟、會社の株主の爲に設けられたるにも非ざれば、將又會社の取引者の爲に設けられたるにも非ずして、正に取締役の爲に、而して監査役の爲に、設けられたる取締役監査役に外ならざるなり

千手觀音

米國の顯職高官、さては、會社銀行の重役には、年少者寧ろ多し、これ其の思想の斬新にして、體力亦旺盛なるの故を以て、重く用ひらるゝなるべし、然るに、我國に於ては、之に反して、殆んどその思想、體力共に頽齡に近き、年長者を以てするを、習とするの觀あり、

斯の習慣あり、爲に老人は老人ならではと自惚れ、若き人も老人ならではと依賴せるものの如く、企業と

しいへば、必ず老人連の名義を要し、有名無實の所謂名義の貸借、盛んに行はれ、羊頭を掲げて狗肉を賣る、誰乎己れと世とを欺くものに非ずといはんや

名義を貸す者、甚だ大膽なれば、名義を借る者、亦極めて横著にして、茲に更に不可解のことは、この老人が各方面の各種の事業に、手を延ばせることなり、そもそも開闢以來、四方八方に手を出して、成功せるものは、獨り千手觀音あるのみ、我國の會社銀行の重役は、多く千手觀音乎

元來、一人一代一事業にて足るものを、一人にて

一事業以上に從事するものは、多藝は無藝、一事業にも成功せざることを、自ら豫言せるものには非ざる乎、人果して萬能なりや、語に曰く、「始あらざるなく、終あるもの尠し」と

人と交るの秘訣

カーライル曰く「誠たれ」と、蓋し一言にして、人と交る祕訣の蘊奥をたゝけるもの乎、語にも「友を得んと欲せば先づ己れ友たれ」と

テニソンとカーライルとは、對面時餘、未だ一言をも交さずして、能く交り得たりきとか、云はぬは云ふに優る、蓋し兩雄、心膽相照して、無言の間に、心交を遂げ得たるもの乎

人と交らんと欲して、住居、被服、飲食、歌舞、

音曲、談話等を以て唯一の策と心得、己れの心の準備を忽がせにせるもの、宜しく味ふて可なり、杜甫、「貧交行」の詩を賦し歎じて曰く

翻手作雲覆手雨　紛紛輕薄何須數
君不見管鮑貧時交　此道今人棄如土

と、心だに誠の道にかなひなば、よし山海の珍味なくとも、歌舞音曲の饗應なくとも、居は茅屋にして、身に絹布を纏はずとも、そもそもまた何の陋か之れあらん哉、誠は心交を結ぶ第一の祕訣なり

曾て聞く、一畫工、其の友の肖像を寫すに、其の

友、右頰に汚點ありければ、半面の圖を描きたりと、面白き話かな、常に同情と敬愛との眼鏡を用ひて、人を見よ、魚心あれば水心あり、友の短所を見ずして長所を採るは、聽て是れ心交を結ぶ第二の祕訣なり

明治天皇の御製に

過をいさめ交して親むが
まことの友の心なるらん

吾輩は教育家なり

校舍に於て、教鞭を執るものを教育家とせば、工場に於て、商品の製造に從事するものを製造家とし、田畑に於て、鋤鍬を手にするものを農業家とす、而して經濟界に於て、商工の業に從事するものは、實業家にして、教會に於て、說教するものは宗教家なり

宗教家は信徒を作り、實業家は金を作り、農業家は田を作り、製造家は商品を作る、而して教育家は人を作る、教育家の任務や亦偉大にして、崇高なるもの

といふべし

廣き意味に於ては、教育家は、單に校舍にある教師のみに限らず、家庭に於ては父兄、社會に於ては、凡べての先輩、亦教育家にして、その子弟に對し、後輩に對し、教育家たるの義務Dutyと、特權Privilegeとを兼ね有するものぞ、この意味に於て、凡べての人は教育家なり

凡べての人よ、希くば、吾輩は教育家なり、との理想を有せよ、一言一行、何人かに、何等かの感化を與へよ、自重愼獨、以て言行を正うせば、不知不識の

間に、不妙良感化を他に及ぼし得るものぞ、俚諺にも

勸學院の雀、蒙求を囀り

門前の小僧、習はぬ經を讀む

と、試みに、所謂教育の門外漢を、無名の教育家とせん乎、無名の教育家が、有名の教育家に優りて、有せる教鞭は、正に躬行の二字に在り、竹の鞭に代ふるに、躬行の鞭を以てせんか、その結果の及ぶ所、或は有名の教育家をして、三舍を避けしむべく、「學校教育は校門を出でず」てふ歎聲は、遂に其の生命を失ふに至らん

吾輩は教育家なり

努力せよ無名の教育家

自重せよ有名の教育家

習字と體操

學校の程度に進むに從ひて、學生々徒の、漸く等閑視せんとする、傾向を有する科目を、習字とす

習字によりて、修身の採點をなし得べしと迄、確信せる教育家すらあり、古來「書はその人の性格を表はす」とも云へり、簡單なる習字とはいへ、之より悟り得べき德、決して尠しとせず

若し夫れ、端坐默考して、一管の筆に、全幅の精

神を、傾注せんか、其の間、微しの邪念も、爲に乘ずるの隙なく、修養上極めて大なる力となるものぞ

習字は啻に、修養上に益あるのみならず、文字は言語と共に、意志表示の機關にして、下手より受くる己が損失は、自業自得とはいひながら、その亂惡不明の文字を以て、人に迷惑を掛くるに至りてば、其の罪決して輕しとせず、かかる大切なる習字を輕んずるとは、そもまた何の謂ぞや

而して習字と同樣の運命に陷り、同樣の待遇を受くる他の科目を體操とす

麗かなる空を天に、美しき光線に浴し、新しき空氣を呼吸しつゝ、教官の命令の下に、一齊に體軀の運動をなす程、樂しくして、味ふべき科目、體操を措きて他にまたあらんや

若し夫れ、一段の趣味を以て、この科を修めんか、啻に體軀を鍛ふに止まらず、規律、服從、共同心の養成等、精神上に及ぼす効果は、蓋し幾何ぞ

建築と趣味

208 ——— 新古今の趣味

凡そ邸宅の建築ほど、趣味多く趣味深きものはなかるべく、同時に其の建築によりて、主人の趣味の如何を覬ふことをも得べし、其の家の主人が世に所謂俄分限者にして、ただ金錢のみを多く掌中にし、其の人格の修養、之に伴はざるものならんか、恰かも木に竹を接ぎたるが如く、玉石混交したる建築をなし、却て世の笑の種となること甚だ少しとせず

世に建築ほど、建築者の性格を、忌憚なく露すも

のはあらじ、米國の建築の多くが、開放的 Open なるは、聽て米國氣質の開豁 Open minded なるを示し、內地の建築の多くが、高き塀を以て圍ひ蟄居的なるは、聽てその因循なるを表はせるには非ざる乎

邦人の庭園の、概して箱庭的なるは、眼界、胸量共に甚だ狹きを示し、米人の庭園の、壯大なる景色と見晴とを有せるは、他に事情あらんも、聽て彼の思想襟度の、雄大なるを示すものにはあらざる乎、阪神間に於ても、同胞の登山には、寧ろ嶮峻なりとせる、かの六甲の巓に、無慮數十、外人の邸宅を築けるを見

ても、如何に彼等が、壯大なる、自然の庭園を好むかを知り、またその性格の一般をも覗ふことを得るには非ざる乎

個人と人格

214 建築と趣味

人は人工的に、一言一行を爲し得れども、其の一言一行に依て、自ら發露する人格は、人工的なるを得じ、古歌に

底ひなき淵やはさわぐ山川の
淺き瀨にこそあだ波はたて

書家は、書を以て其の性格を見るべしと云ひ、音樂家は、聲色を耳にして、其の人と爲りを知り得べしと云ふ、夏目氏漱石は、文部省美術展覽會を見たる評

論の中に「藝術は自己表現に始まつて自己表現に終る」と云ひ、或文豪は「文は人なり」とも云へり

よく出逢ひ頭に「何ちらへ」「一寸そこまで」「あーさうですか」と問答せるを聞く、その何を話しつゝあるにや、誠に曖昧なる會話ならずや、かかる言葉を常に話し、常に聞きて、敢て異とせざるは、話す人、聞く人、共に不得要領の交換をなせるものなり、英國の俚諺に、「談話は心の畫なり」と謂ひ、論語にも

一言以爲知、一言以爲不知

と、ここに要談ありて來る人、冒頭を長くして、

將に立ち去らんとするとき、恰かも序なるかの如く裝ひ、「時に」の前置詞をおき、漸くその用向を話す、聞ける人「まー考へて置きませう」「かしこまりました」と、其の場逃れの答を以てし、彼の去るや、更に顧みる所なきが如き、正に無責任と無責任との、相互披露に非ずして何ぞや

古人は誨へて「君子は一顰一笑をも忽かせにせず」と云へり、一本の手紙、一物の取扱、一品の買入、一個の贈物たりと雖も、その人の人格は伺はるゝものを心すべき事にこそ

商品の粗製と人間の濫造

窮しては、明日の百より今五十、國民、常に眼前の小利に眼眩みて、遠大の大利を顧みるの暇なく、片時をも早く、唯々金錢を掌中にせんと是れ祈り、從て矢鱈に、その場逃れの商品を粗製して、賣付けんと欲し、己れの商品をして、己れの信用を傷はしめ、自暴自棄の極、軈て國家の體面をも汚がす、俚諺にも、「身から出た錆」「いそがば廻れ」とあり

商品の粗製を以て、夙に普く知られたる邦國は、

また領土の狹隘、人口の密度に於ても、世界に例なからんとするにも拘らず、極めて無造作に、人間を濫造するを見ずや、年々增加する、數十萬の人數のみを見て、直ちに膨脹的國民なりと早呑込みする勿れ

商品の市場を求むると共に、一方に於て商品の粗製を警め、而して人間のはき場を考ふると共に、須く人間の濫造を戒むべし

知らずや、粗製されたる商品と、濫造されたる人間とは、共に世界の市場に、其の賣行の捗々しからざることを

榮螺と鎖國

道話に榮螺の卑下自慢の話あり

「アノ榮螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある、ソコデあの榮螺が、何ぞといふと、うちから蓋をぴつしやりしめて、丈夫な事ぢやと思ふて居まする、鯛や鱸がうらやましがり、コレさざえや、おまへの要害は大丈夫なものぢや、うちから蓋をしめたがさいご、外からは手がだせぬ、さりとては結構な身上ぢやと云へば、榮螺が髭をなでて、おまへ

方の其の樣に云ふてくれるなれど、あまり丈夫な事もない、しかしながら、マアかうしてゐれば、まんざら難儀なこともないと、卑下自慢をしてゐるとき、ざんぶりと音がする、榮螺は内から急に蓋をしめて、じつと考へてゐながら、今のは何であつたか知らぬ、網であらうか、釣針であらうか、是ぢやによつて、要害が常にしてないと、どうもならぬ、鯛や鱸は捕られたか知らぬ、さても心もとない事ではある、シタがまづおれは助かつたと、兎角するうち時刻もうつり、モウよからうと、そつと蓋をあけ、あたまをぬつとさし出し

て、そこらを見まはせば、何となう勝手が違ふやうな、よくよく見れば、魚屋町の肴やの店に、一ケ十六文と、正札付に成つてゐました」

と、維新の時まで、榮螺にさも似たる鎖國の結果、端なくも、ここに得たる國民の排外思想は、海外に於ける、所謂排日——若し如斯文字のあたれりとせば——のそれよりも更に手强く、我國の海外發展を抑制 Check しつゝあるものの如し

皇國の興廢を卜すべき、倫理思想の幼稚なる、經濟思想の井蛙的なる、一として鎖國の賜ならざるはな

く、夙に鎖國思想の一轉を期するは、識者の正に勗むべき急務には非ざる乎

海外の事情に幼稚なること、同胞の如きはあらざるべし、國家、既に日本の日本より變じ、世界の日本と化したるの今日、世界の事情に明なると否とは、直に國家の盛衰に關すること言を待たず、而して海外の事情に精通せんと欲せば、宜しく榮螺的生活を脱し、斷乎として排外思想を打破すべし、而して排外思想の打破は、國民の外遊に如かず

敢て言はんとす、苟も資力 Means を有するものは、

一日も早く一度たりとも、足を海外に運べと、可愛子には旅せしめよ、世の父母よ、多少にても國家の將來を慮る士よ、愚にもつかざる杞憂をすて、自ら出でざるまでも、少く共己れの子弟をして海外に旅行せしめよ、知らずや、都をば霞と共に立ちしかど、秋風ぞ吹く白河の關、と、能因法師の詠ぜし、昔の江戸長崎よりも、今の倫敦、紐育の、遙に近づけることを

五十年前、象山、松陰の海外渡航を送りて

之子有靈骨　久厭整躄群　奮衣萬里道
心事未語人　雖則未語人　忖度或有因

送行出郭門　孤鶴横秋旻　環海何茫々
五州自爲隣　周流究形勢　一見超百聞
智者貴投機　歸來須及辰　不立非常功
身後誰能賓

と、セイント　アウガスティンは、「世界は一大書册なり、而して家を出でざる者は、僅にその一頁を讀めるのみ」と云へり

明治天皇の御製に

よきをとり惡しきを捨てゝ外國に
劣らぬ國となすよしもがな

別莊と旅行

變化は人生の鹽なり、平坦なる道路を歩む馬は、山阪を行く馬よりも、速かに斃る、何となれば、平坦なる道路は、山阪よりも、歩行に容易なりとはいへども、變化なければなり、馬、尙然り、況んや人間に於てをや

山間に住めるもの、海濱に別莊を構へ、海岸に居るもの、山谷に別宅を設く、大都會の中央に、本宅を有するもの、幽邃閑雅の地に別業を造り、大陸に邸宅

を有するもの、山水明媚の島國に別墅を營む、蓋し人情の自ら然らしむるところ乎

抑も別莊の價値は、その位置、空氣、建築等に於て、本宅と全く異なれる所にあり、是れ別莊の生命にして、この本領を沒却せる別莊は、別莊としての價値更にあることなし、而して別莊中最も進歩したるものを、快走船とす、自由に世界の到る處に廻遊し得、その世界的にして、趣味と變化とに富める、恐らくは之に過ぐるものなかるべし

試みに、邦國の別莊を有する人を見よ、果して別莊の意味を解せるもの幾何かある、知れりや、同じ都會の内に住宅と別莊とを兼ね有するもの、同じ海濱に本宅と別邸とを造れるもの、果して別莊の何の意なるやを

帝國の如き、四面環海の國土にありては、山といへば水、水といへば山にして、殆んど變化の見るべきものなければ、必ずしも別莊の要なく、「貧乏したけりや別莊を持つに限る」の語さへあり、況んや餘りに富裕ならざるものに於てをや

敢て別莊を有たんと欲せば、何すれそ夫れ、海外

に之を持たざる、別莊を好む紳士、奮發一番しては如何に、若し夫れ、烟霞の痼疾ある者に至つては、なせ旅行を、別莊よりも更に變化多き、旅行を

京都の蛙と大阪の蛙

「むかし、京にすむ蛙が、かねて大阪を見物せんと望んで居りましたが、此の春おもひ立つて、難波名所見物と出かけ、のさのさと這ひまはり、西の岡向の明神から、西街道を山崎へ出で、天王山へとのぼりかかりました、又大阪にも、都見物せんとおもひ立つた蛙が有つて、これも西街道、瀬川、あくた川、高槻、山崎と出かけ、同じく天王山へとのぼりかゝり、山の巓で、兩方が出合ひました、ナニが互に仲間同志なれ

ば、めんめんの志をはなし、扨兩方がいふ樣は、此のやうにくるしい目をして、漸々とまだ中程ぢや、是から互に京大阪へゆきなば、足も腰もたまるまい、爰が名におふ天王山の巔、京も大阪も一面に見わたす所ぢや、ナント互に足つまだて、脊のびして見物したら、足のいたさが助からうと、相互に相談きめて、兩方がたちあがり、足つまだてゝ、向ふをきつと見わたした、京の蛙が申しますには、「音にきこえた難波名所も、見れば京にかはりない、術ない目をしてゆかうより、是からすぐに歸らう」と、大阪の蛙も目をぱちぱちして、

嘲笑ふていふやう、「花の都と音には聞けど、大阪にすこしもちがはぬ、さらば我等もかへるべし」と、雙方互に色代して、又のさのさと這ふて歸りました」とか

田舍に在りて都會を見んとし、內地に在りて海外を察せんと欲するもの、よろしく味ふて可なり、語にも、井蛙大海を知らずと、島國に在りて、我物顏に、大陸を論ずると、針の穴より天を闚くと、擇ぶ所何れぞ、希くは、憂國の士、社稷を尊ぶの餘り、或は偏して、手はつけど、目は上につく蛙たらざらんことを

日米の國交

輓近、我國の上下を通じて、盛に流行せる輿論の一を、正に日米の問題とす、顏を赤らめ、額に青筋を立て、口角泡を飛ばし、否米國の排日、否日米の戰爭と、甲論乙駁、臆面もなく、憂國の士を氣取る才子益〻多く、國家の爲に、全然資らざる感情的囈語を、發作的に、言筆になせるものの何すれそ其れ多きや、俗に所謂彌次馬連までが、空々寂々、根據もなく、定見もなく、而して己れの分限をも度外視して、苟も事國

家の休戚に關する重要問題を、輕々に論じ、蛙鳴蟬聲前後の分別もなく、俗に所謂人氣に投じて附和雷同す、如斯は果して國家の慶事にや、國家の爲悅ぶべき現象にや

彼等果して知れりとするや、彼を誹りて、その禍の却て我に至ることあるを、彼等果して知れりとするや、苟且にも日米の國交に瑕疵を生ぜんか、仍て以て痛痒を感ずるは、何れの國なるやを、彼等果して研究せりとするや、彼我の歷史的關係の一頁を、彼等果して目擊せしことありや、彼我貿易上の數字を

而して米國の國體、米國民の祖先の人種別、歐洲諸國と米國とを結付くる、宗教資本血族の三綜束、さては米國の文明、及び中堅を爲す國民の倫理思想、何れか一にても、嘗て之を夢にだも見たることありや

己れの見聞せざる所を、恰かも知悉せるかの如く、早合點して、不謹愼にも、筆と口とに任せて、國家の消長を議するが如きは、啻に友邦に對して、信義を缺く而已ならず、我國の爲、忽かせにすべからざる、所謂獅子身中の虫なり、中堅を爲す我國民よ、希くば知らぬが佛、蛇に怖ぢざる盲をして、徒に之を惑はしめ、

雀おどして鶴失(うしな)ふなからんことを、句に
根をしめて風にまかする柳かな

品性の掲示場

仰ぎて物言ふ人あり、俯して物言ふ人あり、右向きて物言ふ人あり、左向きて物言ふ人あり、世、斯の如き人を稱して、言中に自信なき人といふ

元より、自信なき爲にする場合もあらん、或はなくて七癖、あつて四十八癖、單に對話中の癖なるやも未だ測り難し、然れども常識を以て考へんか、茲に己れの意志を、人の腦裡に徹底せしめんと欲し、態〻顏を他に背くべき要、何處にかある。

顔は誠の掲示場なり。

抑も顔は、言行と共に、忌憚なく其の人の人格を描き出す、品性の掲示場なり、この掲示場を他方に、己れの欲する所を云はんとす、頗る御念の入りたる對話法に非ずや

口は虚言を吐き得れども、顔は然らず、故に世の人、人の云ふ所の眞贋を判斷せんと欲せば、其の口にて言ふ所と、顔にて言ふ所と、正に符合せりや否やを見るに如かず

思ひ裡にあれば、色外にあらはる、請ふ勿忘、口言はんと欲する所を、品性の掲示場即ち顔も亦言ふこ

とを

顔は誠の掲示場なりと。

㊞

此の世の宿帳

天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、と古人もいへり、豐臣秀吉は、京都阿彌陀ヶ峯の頂上に「豐國大明神」と此の世の宿帳を附け、なき數に入る名をぞ留め、菅原道眞は、津々浦々に「天滿天神」と宿帳を附く、「沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船」とは豪膽なる紀の國屋文左衞門が宿帳乎、梁川星巖の詩に

豹死留皮豈偶然　湊川遺跡水連天

人生有限名無盡

楠氏精忠萬古傳

此の世てふ宿屋に、永々逗留して、茶代をおかざる鐵面皮漢あり、甚しきは、合客に迷惑をかけ、宿賃をも支拂はずして、彼の世に遁竄する卑怯者すらあり、彼等は死して、殼を留むる珊瑚の微生蟲にだも及ばじ

或は、此の世の宿屋に逗留して、爵位勳等族籍を、麗々しくも書き立て乍ら、己が姓名をも記さずして、彼の世へ旅立つ周章者あり、片腹痛き限りにこそ

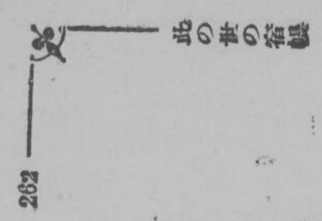
商に工に農に、或は宗教に、文學に、教育に、美術に、各己が天職を全うし、忌憚なく自己を發揮して、

永へに、不朽の生命を保つことは、蓋し萬物の靈長たる人と生れし所以には非ざる乎

TEACH me your mood, O patient stars!

Who climb each night the ancient sky,
Leaving no space no shade, no scars,
No trace of age, no fear to die.

R. W. EMERSON.



清水川四郎

「紺屋の明後日、鍛冶屋の今度」とは、邦人の契約思想の、如何に幼稚なるかを、證し得て餘す所なし、始めより不可能なるを知り乍ら、無遠慮にも之を諾ひ、約束の期日に至りて、化けの皮を脱ぐ、契約に、かかる愛嬌の必要あらんや

ある邦人は、得心の上、契約書に署名捺印し乍ら、後日に至り、己れの手許の都合によりて、之を左右せんと欲し、相手方が、契約書によりて其の履行を強ふ

るや、恬然として曰く、「契約書は書き物にして、物言ふべき物に非ず」と、米國の上下を通じて、嚴密に行はるゝ「契約は神聖にして犯すべからず」と比較して面白き對照に非ずや

米國にては、紺屋の明後日と、云はんと欲する場合には、「晴天三日間」と云ふ、豫め不可抗力ある場合を想像して、必ず履行し得らるゝやう、總べての契約をなすを常とす、凡そ人にして、契約を履行し得ざる恥に過ぎたる恥あらんや

"You coward!" (汝、卑怯者奴) 試みにこの語を、米國の三歳の童子に向つて放ち見よ、彼はその他の總べての侮辱よりも、更に苦痛を感ぜん

"Honorable" (敬すべき) の語は、マーク アントニイが、ジユーリアス、シイザーの死骸を携へて、ローマ市民の面前に現はれ、ブルータスの不仁不義の及にて斃れたる、シイザーを痛み弔ふ時に、ブルータスに向つて三度用ひたる敬語にして、泰西に於ける無上

の敬語なり

蓋し Honorable と Coward とは、兩極端を意味するものか、"You coward!" を大人に用ふる場合は、主として陰にて人を中傷する人に對しての場合、人の一寸我一尺、陰口を叩く者は、自ら遁匿すべき孔を掘るもの、余は言はんとす

一概に我を賞むる者は、未だ我の全部を知らず
陰にて我を誹る者は、未だ全然我を知らず
面前にて我を責むる者は、我の常に求めて止まざる恩人なり

而して我未だその恩人に會することの、甚だ尠きを怨む

と、道歌に

涼しけりや涼しすぎると人の口
戸はたてられぬ夏の夕暮

人を呪へば穴二つ、陰口と、讐者を誹ると、闇に鐵砲を放つと、其卑怯何れか、芭蕉の句に

物いへば唇寒し秋の風

十九年間一千萬圓

往來の人の走れる、米國より、歸省する毎に、際立ちて見ゆる所のものは、邦人の歩行なり、雙手を懐に、左眄右顧、漫然と、歩むともなく行く人の多き

一事が萬事、總べて其の範を脱せず、紐育中央停車場が、四年前後にして、四億圓の工事を竣れるに對して、東京にては千二三百萬圓の中央停車場を建築するに、優に十九箇年の長年月を費したるに見るも、その如何に悠々たるかを、察するに足らずや

汽車の速度の如きも、彼の五十哩に對し、我にては、速きものも漸く其の半に過ぎず、而して更に、邦人の落付たるは金錢の支拂振り歟

預金の引出預入の爲に銀行に行きても、米國のそれよりも尠くとも數倍の時間を要す、故に我國の銀行は待てる人もて繁昌せり

米國にては、申込後數分を出でずして、架設さる電話も、我國にありては、申込みて後、數年にして漸くに架せらる、故に短命の人は、此の世にて申込みたる電話を、彼の世にて使用せざるべからず

航海の妙趣

太平洋に浮ぶ毎に嘆ず、上流の船客に我國人の少きを、水を以て周圍せる、島國に生れたる邦人は、航海の趣味を解せざるには非ざるべし

無造作に、不尠光陰を虚しくするより見れば、航海の時間なしとも思はれず、酒食、歌舞、音曲に浪費するより察すれば、航海の費用を有たずとも思はれず

一小島に蟄居して、海外に出づるの要なしとするか、海國男子、怒濤を恐れてか、去りとて文明は交通

機關を發達せしめ、世界の距離をしかく短縮したるに、内地に於て、餘りに忙はしくして、未だ海外に出づるの暇なしと云ふか、知らず何故に航海者の少きかを、食はずぎらひ耶、將た羹におそれて膾をふくにや

歐米人は、男女老幼を問はず、閑さへあれば、大洋に浮ぶを以て唯一の樂となせり

人生航海ほど、心身を喜ばしむるものなかるべし、怒濤益〻怒つて益〻妙、靜まりてもよし、風ありてもよし、晴れてもよし、降りてもよし

大洋に浮び、四顧茫漠たる只中に、朝暾の悠揚として昇るを見よ、壯觀譬ふるものなく、而して夕陽の波に沈む時、金色をなせる雲の峰を眺めよ、美觀寫すに辭なし、若し夫れ、玉兎の出でて、銀波の閃々たるを見んか、恍惚として、仙境に遊ぶの想あらん、文屋康秀の歌に

草も木も色變れどもわだつ海の
浪の花にぞ秋なかりける

人と土

航海術如何に進歩し、飛行機如何に發達すとも、鳥ならざれば、常に空中に居住し得ざるべく、魚ならざれば、常に水中に棲息することを得ざるべし

人は竟に土と離るゝこと能はず、よし科學の力により、自由に空中を飛翔し、水中を潛行し得とも、衣食住は必ず之を土より求めざるべからず

土なくして人あること能はざるべし、故に人にとりて、土ほど大切なるものは非ざるべし、歴史の傳ふ

る戰爭も、詮ずればまた土の問題に外ならじ

土を得る方法に二あり、干戈によりて領土を擴張する其の一なり、平時國民が金錢を以て之を購買する其の二なり、列强國民、汲々として、如上の何れかによりて、土を獲ることに力めり、試みに左表を見よ

列强に於ける領土の變遷

	一五〇〇年 百萬方粁	一七〇〇年 百萬方粁	一九〇〇年 百萬方粁	四百年間に膨脹したる係數
英國	〇・二三六	二・〇〇	二八・一	一一九・四
露國	二・二〇〇	一三・七〇	二二・四	一〇・二
佛國	〇・五〇〇	三・八〇	三・九	七・八

獨逸	〇・八〇〇	〇・七〇	三・一	三・九
土耳其	一・四〇〇	三・九〇	二・九	二・一
葡萄牙	〇・七〇〇	五・四〇	二・二	三・一
和蘭	〇・〇四〇	〇・八〇	二・一	五二・五
墺太利匈牙利	〇・二〇〇	〇・六〇	〇・七	三・五
伊太利	〇・四〇〇	〇・三〇	〇・六	一・五
西班牙	〇・六〇〇	一一・一五	〇・五	〇・八

翻て我邦は如何に、果して二千五百七十有餘年間人口の增加率と並行して、土の分量は增加せりや、余は疑ふ、邦人は船に醉ひたるときの外、陸を思はざる國民にはあらざるかを

列強本國及屬地別

	本國面積	屬地面積	合計面積	全世界陸地面積に對する百分比
英國	一三一、三九一方哩	一一、三三六、五六三方哩	一一、四五七、九五四方哩	二一・九五
露國	一、八六二、五二四	六、七八五、一三三	八、六四七、六五七	一六・五五
佛蘭西	二〇七、〇五四	四、七七六、一二六	四、九八三、一八〇	九・五四
米國	二、九七三、八九〇	七二三、二〇四	三、六九七、〇九四	七・〇七
獨逸	二〇八、七八〇	一、〇二七、八二〇	一、二三六、六〇〇	二・三七
白耳義	一一、三七三	九〇九、六五四	九二一、〇二七	一・七六
葡萄牙	三五、四九〇	八〇二、九五二	八三八、四四二	一・六〇
和蘭	一三、六四八	七八二、八六二	七九五、五一〇	一・五三
伊太利	一一〇、五五〇	一八五、二三〇	二九五、七八〇	〇・五七
西班牙	一九四、七八三	八五、八一四	二八〇、五九七	〇・五四
澳地利匈牙利	二四一、三三三	一九、七六八	二六一、一〇一	〇・五〇
日本	一四七、六五七	一二、一四九	二五八、八〇六	〇・四九

人口の増加につれて、その國の土の分量の増加せざらん乎、その國の前途は果して如何に、ローマは一日にして成らず、蒔かぬ種の生えざる限り、事の成るは成るの日に成るに非ずして、必ず因て來る所あり、此所國民の焦慮一番を要する所にはあらざる乎

内地に於て、土を得ること能はざれば、之を海外に求めざるべからず、而して之を海外に求むるには、

ただ前にあげたる二つの方法あるのみ、而して二者孰れを優れりとする歟

海外發展十二言

一　皇國の興廢は國民の海外思想の多寡にあり

二　明治天皇の御誓文中にも知識を世界に求めよ
とあり

三　內輪爭を內輪にして盡せ全力を海外に

四　身を海外に出し得ざる者も出せ手を海外に

五　手を海外に出し得ざる者も注げ目を海外に

六　耳目にする而已にても心浮く海外雄飛てふ四
大文字

七　國家の爲め憂ふべきは彼れの排日に非ずして
　我の排外にあり忽かせに爲すな本能寺にある
　敵を

八　一戸の家には相續人は一人にて足るものを其
　の他は何すれそ出でざる海外に

九　領土狹しとて悲觀する勿れ同胞を迎ふる青山
　は世界到る所にあり

一〇　若し夫れ同胞を迎へざる青山ありとも彼れを
　責むる勿れ唯努力せよ

一一　島國には別莊の要無かるべし變化を欲せば旅
　行せよ海外に所謂帝國の紳士

三　一見以て未だ成功せざる在外同胞をも嘲ける
　な在内同胞

養子と養家

領土狹隘にして、人口夥多なる國の、深慮せざるべからざる緊急問題を海外移民とす、而して移民の行先を養家とすれば、移民は卽ち養子なり、同じ親の子にも出來不出來あり、而して養子には、出來よきを遣はすを以て、養家の爲とし、實家の爲とす、移民も亦同じく、體格、才智、品性共に優秀なる者を出すは、海外の爲、母國の爲なり

移民の行先が、先進國ならんには、選擇したる上

にも、選擇したる者を送らざるべからず、何となれば移民は本國を代表するものにして、一擧一動、直ちに本國の體面に關するものなればなり、而して最も忽かせにすべからざることは、移民を出す前に、豫め移民の行くべき海外の事情を、精細に知悉し置くこと之れなり

養子及び移民は、その實家及び本國を忘るべからざると同時に、養家に對しての責任、海外に對しての義務をも怠るべからず、即ち海外の爲に盡すことは、聽て是れ本國の爲なり、努力せよ移民、海外の爲に、

故國の爲に

養子及び移民よ、養家及び海外は、卿等が墳墓の地ぞ、化せ此處に白骨と

試みに例を菅原手習鑑にとらん、本國を菅相丞とし、海外を時平とせよ、移民は正に松王乎、移民たるもの、習へ松王に

己れの利害、感情の爲に、時平と衝突することあらんか、乃ち菅相丞の爲たらんと欲して、能はざるべし、よし、梅は散り櫻は枯るゝ世の中に、何とて松はつれなかるらん、との一時的誤解を享くることありと

も、夢、時平に嫌忌せらるゝことあるべからず、短慮は功を成さず、句に

氣に入らぬ風もあらうに柳かな

三十六ケ條の内三十五ケ條

一　知らざることは語るべからず

二　おほげさに物言ふべからず

三　信ぜざることを口にすべからず

四　陰にて人を害ふべからず

五　否と言ふべき時には必ず否と言ふべし

六　競爭の手段として他を誹るべからず

七　成し得べからざることは決して引受くべからず

八　褒められても矜るべからず

九　そしられても怒るべからず

一〇　いじめらるゝ時には張良と韓信とに習へ

一一　あざけらるゝ時には「コロンブス」を思へ

一二　中傷するものありとも之を憎むべからず

一三　克く聞くべし

一四　神に感謝して常に己れのベストを盡せ

一五　克くあきらむべし

一六　成功を急ぐべからず

一七　寸陰をも空しくすべからず

一八　人はこの世に働きに來たることを忘るべからず

一九　憂きことのつもるとも夢落膽すべからず

二〇　未熟を恥とするに及ばず

二一　怠らず行け

二二　過ちたらば直ちに悔ゆべし

二三　至誠を以て人に交はれ

二四　不絶宇宙のあらゆるものより學べ

二五　高ぶるべからず

二六　親切と犧牲とに就ては人に後れを取るな

三十六ヶ條の内三十五ヶ條

二七 入るを計りて出づるを制せよ

二八 借るな貸すな

二九 煙草を喫すべからず

三〇 酒を飲むべからず

三一 身のまはりは清潔にせよ

三二 常に精神を快活に保つべし

三三 良心の命にさからふべからず

三四 旅行せよ讀書せよ

三五 神を恐れて人を懼るゝな

欠

蓋し不斷向上する人の過去は過失にして、過去の過失は即ち向上の踏石乎、宜なる哉、人事往として塞翁が馬と

カーライル曰く「過失は人生の踏石なり」と、

Life, like war, is a series of mistakes, and he is the best who wins the most splendid victories by the retrieval of mistakes. Forget mistakes; organize victory out of mistakes.

F. W. ROBERTSON.

人、元全智全能に非ざれば、豈、過失なきを保せんや、ただ同じ過失を繰返さざるものを以て、賢者とし、然らざるものを愚者とす

過失の爲に挫折する者を、是れ薄志の人といふ、何ぞ勇を鼓して邁進せざる、「志は氣の帥なり」と孟子も云へり、落ちては飛び、飛びては落ち、落ちても落ちても、また飛ぶ程に、遂に柳に飛付たる蛙を見ずや彼は吾人の先輩なり、龜鑑なり

新島襄先生居室の額(襄稿海舟書)に

自處毅然　處人靄然

無事澄然　有事嶄然
得意冷然　失意泰然

と、誠められたり、過失をなしても、泰然自若として之れが判斷を己れの良心に索め、其の判斷を峻つて徐ろに斷行すべし

明治天皇の御製に

大空にそびえて見ゆる高嶺にも
のぼれば登る道はありけり

失望と感謝

「幸福は、災害の假面を被つて來る」とは、英國の政治家、ビイコンスフイールドの警句なり、災害その假面を去れば、幸福となる、希くば人生より、失望の二字を削らしめよ

失望は、神の授くる報酬と、我々の豫期せし所のそれと、相異する場合に於て起るものなり、されどそは唯、形と時とを異にする而已にして、神意の深遠にして宏大なること亦實に此に存す、神は凡べての人に

失望を與へざれば、人は當に凡べての失望に代ふるに感謝を以てすべし

憎しとて叩くに非ず雪の竹、神が報酬を與ふべくして與へざるは、之を與へざるを以て、與ふるに勝る時に於てのみ、急がずば濡れざらまじを旅人の、あとより霽るゝ野路の村雨、這般の神意は、到底吾人の覬知し得ざる所、天網恢々疎にして漏さず、吾人は唯益〻努力するある而已

此の秋は風か水かは知らねども
其の日のわざに田草とるなり

God chooses work for every creature which will be delightful to them, if they do it simply and humbly.

JOHN RUSKIN.

感謝しつゝ働く者に落膽なるものなく、感謝によりて始めて、心の平和は得らるゝなり、故に徒に過去に執著し、未來を悲觀することなかれ、また一時の蹉跌に失望することなく、宜しく捲土重來の勇を鼓し、禍を轉じて福と爲すべし、古歌に

求むれば求むるまゝに月雪も
花も紅葉も玉も錦も

と、運命は勇者を恐れ、怯者を恐れしむ、カーライル曰く

Evil, once manfully fronted, ceases to be evil.

後醍醐天皇と順徳上皇

一日、笠置山の麓に跪きて、元弘の昔、忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひ、晝は青塚の蔭に、夜は野分の露分け迷はせつゝ、落ちのび給ふ御道すがら、木蔭に立ち寄らせ給ひし時、下露のはらはらと、御袖にかゝりけるを御覽ぜられて

さして行く笠置の山を出でしより
天が下にはかくれがもなし

と、詠じ給ひしに、扈從せし藤房卿、泪をおさへて

いかにせんたのむ蔭とて立ちよれば
なほ袖ぬらす松の下露

と、唱和し奉れりといふ、當時の御艱苦を、そぞろに偲びまつり、長恨綿々、去るに忍びざりき

幼き頃の一夏、草鞋脚絆に身を固め、小間物を鬻ぎつゝ、佐渡の國に渡り、相川を過ぎて、畏くも、逆臣義時の計ひにて、此の島に遷らせ給ひし、順德上皇の

なけば聞くきけば都のこひしきに
この里すぎよ山ほととぎす

と、御詠あそばせしといふ八幡の里を過ぎ、同時に、隱岐の國へ降りましゝ御父君、後鳥羽院の御上を慕はせられ

いざさらば磯うつ波にこと問はん
隱岐の殿の方には何事かある

と、詠み給ひしといふ戀が浦に到り、御廟の前に坐し其の昔、上皇が黑木の御所の御詫び住居にて

かくばかり身のあたゝまる草の實を
ひえの粥とは誰かいふらん

と、詠じ給ひしこと、また但馬に御流謫の皇子、雅仁

親王の

露の身のおき處さへなかりけり

野にも山にも秋風ぞ吹く

の御歌など偲びまつりて、深く心に戒めたることあり き、畏くも竹の園生の御身を以てして、尙この御辛酸を嘗めさせ給ふ、吾等、如何でか、艱苦を託ち、不平を訴へ得べけんや

著者の見る神

生に死あり、死に生あり、釋迦、孔子、基督は、遠く二千年の昔に、此の世を去り、而して未だ去らず、普く衆生を濟度しつゝ、永へに生けり、されば肉體に死あり、靈に永久の生あること誰乎之を疑はん

今日は昨日の明日にして、今日は明日の昨日なり、去年は今年の昔にして、今年の後は來年なり、而して吾人は過去の經驗によりて、現世の次に必ず未來のあるを疑はず

宇宙間の森羅萬象事々物々、一として因果律の埒外にあるものなしとし、因果の理にして眞なりとせば、惡因惡果、善因善果、過去は現在の結果たらざるべからず

は現在の結果たらざるべからず

人の此の世に生れ來るや、全く己れの力にあらざるは元より、產みたる父母のみの力にもあらざるは、父母の意の如くならざるを見ても明かなり、於是乎己れの生を掌る力の、なほ己れ及び父母以外にも存することを認め得ん

あすありと思ふ心のあだ櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは、生あるもの必ず死なかるべからず、無常の風は時を嫌はず、死も亦到底、己れの力にて左右し能はざる所、隨つて死を掌る力の、己れ以外に存することを知り得べし

生は人生の始にして、死は人生の終なり、肉體は土より出でて同じ土に復り、靈は生を司る力より出でて同じ力に復る、生と死とを司る力は、やがて人生の有らゆる現象を指揮し、現世をも支配す、現世を支配する力は軈て現世の原因たる過去をも左右し、現世の結果たる未來をも掌る

ビスマークは、「若し余にして神を信ずることなかりせば、分時も宰相の椅子に止まる能はざりしならん」と云ひ、ナポーレオンは、「神祕を蔑視するは愚人のみ」と誠めたり、古歌にも

己が目の力で見ると思ふなよ
月の光で月を見るなり

燬くが如き炎天に、獨り山の巓を往き、偶〻路傍に待てる樹下石上に憩ひ、耳を傾けよ、梢吹く風は美妙なる音樂を奏し、打掛けたる腰石は、誇り顔に、何をかを我に語る、平忠度の歌に

行き暮れて木の下蔭を宿とせば
花や今宵の主ならまし

高松の栗林公園に遊ぶ人、變じて石と化したる樟を見るべし、試みに霎時此の石に對して佇め、石は默默幾多の歷史を語らむ、阪神電車に乘る人、半球を伏せたるが如き甲山の項上に、嚴霜烈日、よく嵐に堪へ、超然として樹てる一本の松あるを見るべし、この木亦吾人に不尠教訓を與ふ、菅公、筑紫に貶せらるゝ時、日頃愛せし庭の木に

東風吹かば香おこせよ梅の花

主人なしとて春な忘れそ

木石既に情あり、況んや生物に於てをや、我れを生せる神は、また彼を成す

雪の日やあれも人の子樽拾ひ

見よ、天地の如何に有情にして、其の間如何に純美なる愛の流露しつゝあるかを、而して其所に竭きざる生の光の、燦然として輝けるを

著者は、この愛を生と信じ、この愛以外更に生なしと信ず、神乃愛也、而して神は不朽なり、現世而已に生くる人、即ち肉體而已に生くる人は、未だ以て、

生の味を知る人と言ひ得ず、過去に生き、未來に生くる人にして、始めて神と共に存在することを得ん

With God in my soul and heaven in my eye.

I rejoice in being exactly what I am.

▲ POOR METHODIST WOMAN, 18TH CENTURY.

我旅の道づれ

ひかれなば惡しき道にも入りぬべし
心の駒の手綱ゆるすな

己れの腕一本を杖に、暑さ忘れて蔭忘れぬやう、
親の情と師の恩とを行李に、渡る世間に鬼はなしと、
住み馴れし鄕里を門出して、春は朝日に匂ふ山櫻花、
夏はぼうふりや、蚊になるまでの浮き沈み、秋は實る
ほど、頭のさがる稻穗かな、冬は精出せば氷る間もな
し水車、世は七下り七上り、油斷なく、心の駒に鞭ち

て、我れは此の世の旅路を辿るなり

世の中は、月にむら雲、花に風、おもふに別れ、おもはぬに逢ふ、途上、巧言令色、以て余を迎へたる、酒、女、煙草、投機、交々至り、或は相携へて余を軌道外に誘はんとし、妙計を弄し、奇策を盡し、不尠余の行を惱ませり、兎角敵は多勢、味方は無勢、勝算の見込とても立たざりしに、偶々得たる唯一の援兵、克己の苦闘は、軈て辛うじて、敵を退け得たり

四面楚歌の聲をなせる時、ブース大將の「凡そ改革の事業は、必ず三つの時代を通過すべし、一には嘲笑の時代、二には迫害の時代、三には成功の時代、是れなり」といへるを聞き、恰かも盲龜の浮木に遭へるが如き思をなせり、三月の風、四月の雨を經て、五月の花は咲く、陽氣の發する處、金石も亦透るとか、鶴澤蕃山は

うきことのなほ此の上に積もれかし
限りある身の力ためさん

と、詠めり、何のその岩をも透す桑の弓、不屈不撓邁進したらんには、難關も寧ろ、我旅の興ぞ

明治天皇の御製に

雪にたへあらしにたへし後にこそ
まつの位も高く見えけれ

家康の遺せしまゝに、倦まず急がず、重荷を背に遠き道を行く、余を憐みて、人あり來りて曰く、余の荷物を分たんと、されど余は、わがものと思へば輕し笠の雪、重くとも我荷は人に、讓るまじ、荷ふにつけて荷は輕くなる、とて斷りぬ

程なく、眉雪の老翁に邂逅す、年寄の云ふことは聞くもの、取越苦勞せぬまでにと心得て、道連れになれるを幸に、語る儘に面白き話を聞く、「日本に昔、三

人の豪傑居たり、其の一は首めて章魚を食ひたる人、其の二は初めて西瓜を食ひたる人、其の三は人に先立ちて白粉を塗りて、人中に出でたる人」と敎へ吳れぬ、西諺にも「コロンブスの卵」と言ふ話あり、古歌に

爲せば成り爲さねば成らぬ成る事を
成らぬといふは爲さぬなりけり

と、其の首途に於て要するものは蓋し敢爲の度量乎

盤根錯節に遇はざれば、何を以て利器を別たんや、末つひに海となるべき山水も、しばし木の葉の下くぐるなり、唯々己が義務を、天の命、神の聲

Duty—the command of heaven, the eldest voice of God.

KINGSLEY.

と、之れ念ふて、讀書と旅行とを、己が良心の磨粉と
し、歩一歩、我は、我が行路を、急がず急ぐなり、光
淳の歌に

おこたらず行けば千里の外も見ん
牛のあゆみのよしおそくとも

牛
終

牛

定價 金壹圓五拾錢

著者 岡本米藏（東京麻布区霞谷町上番地）
發行者 株式會社培風館 右代表者 川村理助（東京市小石川区宮下町六十三番地）
印刷者 三毛勉三（深川区古石場町二十二番地）
印刷所 三協舍印刷所（深川区古石場町二十二番地）

大正五年平月廿五日 印刷
大正五年平月廿八日 發行
大正五年平月廿九日 第一版
大正五年平月廿九日 第二版
大正五年平月廿九日 第三版
大正五年平月廿九日 第四版
大正五年平月廿九日 第五版
大正五年平月廿九日 第六版
大正五年平月廿九日 第七版
大正五年平月廿九日 第八版
大正五年平月廿九日 第九版
大正五年平月廿九日 第十版
大正五年平月廿九日 第十一版
大正五年平月廿九日 第十二版
大正五年平月廿九日 第十三版
大正五年平月廿九日 第十四版
大正五年平月廿九日 第十五版
大正五年平月廿九日 第十六版
大正五年平月廿九日 第十七版
大正五年平月廿九日 第十八版
大正五年平月廿九日 第十九版
大正五年平月廿九日 第二十版
大正五年平月廿九日 第二十一版
大正五年平月廿九日 第二十二版
大正五年平月廿九日 第二十三版
大正五年平月廿九日 第二十四版
大正五年平月廿九日 第二十五版
大正五年平月廿九日 第二十六版
大正五年平月廿九日 第二十七版
大正五年平月廿九日 第二十八版
大正五年平月廿九日 第二十九版
大正五年平月廿九日 第三十版
大正五年平月廿九日 第三十一版
大正五年平月廿九日 第三十二版
大正五年平月廿九日 第三十三版
大正五年平月廿九日 第三十四版
大正五年平月廿九日 第三十五版
大正五年平月廿九日 第三十六版
大正五年平月廿九日 第三十七版
大正五年平月廿九日 第三十八版
大正五年平月廿九日 第三十九版
大正五年平月廿九日 第四十版
大正五年平月廿九日 第四十一版
大正五年平月廿九日 第四十二版
大正五年平月廿九日 第四十三版
大正五年平月廿九日 第四十四版
大正五年平月廿九日 第四十五版
大正五年平月廿九日 第四十六版
大正五年平月廿九日 第四十七版
大正五年平月廿九日 第四十八版
大正五年平月廿九日 第四十九版
大正五年平月廿九日 第五十版
大正五年平月廿九日 第五十一版
大正五年平月廿九日 第五十二版
大正五年平月廿九日 第五十三版
大正五年平月廿九日 第五十四版
大正五年平月廿九日 第五十五版
大正五年平月廿九日 第五十六版
大正五年平月廿九日 第五十七版
大正五年平月廿九日 第五十八版
大正五年平月廿九日 第五十九版
大正五年平月廿九日 第六十版
大正五年平月廿九日 第六十一版
大正五年平月廿九日 第六十二版
大正五年平月廿九日 第六十三版
大正五年平月廿九日 第六十四版
大正五年平月廿九日 第六十五版
大正五年平月廿九日 第六十六版
大正五年平月廿九日 第六十七版
大正五年平月廿九日 第六十八版
大正五年平月廿九日 第六十九版
大正五年平月廿九日 第七十版
大正五年平月廿九日 第七十一版
大正五年平月廿九日 第七十二版
大正五年平月廿九日 第七十三版
大正五年平月廿九日 第七十四版
大正五年平月廿九日 第七十五版
大正五年平月廿九日 第七十六版
大正五年平月廿九日 第七十七版
大正五年平月廿九日 第七十八版
大正五年平月廿九日 第七十九版
大正五年平月廿九日 第八十版
大正五年平月廿九日 第八十一版
大正五年平月廿九日 第八十二版
大正五年平月廿九日 第八十三版
大正五年平月廿九日 第八十四版
大正五年平月廿九日 第八十五版
大正五年平月廿九日 第八十六版
大正五年平月廿九日 第八十七版
大正五年平月廿九日 第八十八版
大正五年平月廿九日 第八十九版
大正五年平月廿九日 第九十版
大正五年平月廿九日 第九十一版
大正五年平月廿九日 第九十二版
大正五年平月廿九日 第九十三版
大正五年平月廿九日 第九十四版
大正五年平月廿九日 第九十五版
大正五年平月廿九日 第九十六版
大正五年平月廿九日 第九十七版
大正五年平月廿九日 第九十八版
大正五年平月廿九日 第九十九版
大正五年平月廿九日 第百版
大正五年平月廿九日 第百一版
大正五年平月廿九日 第百二版
大正五年平月廿九日 第百三版
大正五年平月廿九日 第百四版
大正五年平月廿九日 第百五版
大正五年平月廿九日 第百六版
大正五年平月廿九日 第百七版
大正五年平月廿九日 第百八版
大正五年平月廿九日 第百九版
大正五年平月廿九日 第百十版
大正五年平月廿九日 第百十一版
大正五年平月廿九日 第百十二版
大正五年平月廿九日 第百十三版
大正五年平月廿九日 第百十四版
大正五年平月廿九日 第百十五版
大正五年平月廿九日 第百十六版
大正五年平月廿九日 第百十七版
大正五年平月廿九日 第百十八版
大正五年平月廿九日 第百十九版
大正五年平月廿九日 第百二十版
大正五年平月廿九日 第百二十一版
大正五年平月廿九日 第百二十二版
大正五年平月廿九日 第百二十三版
大正五年平月廿九日 第百二十四版
大正五年平月廿九日 第百二十五版
大正五年平月廿九日 第百二十六版
大正五年平月廿九日 第百二十七版
大正五年平月廿九日 第百二十八版
大正五年平月廿九日 第百二十九版
大正五年平月廿九日 第百三十版
大正五年平月廿九日 第百三十一版
大正五年平月廿九日 第百三十二版
大正五年平月廿九日 第百三十三版
大正五年平月廿九日 第百三十四版
大正五年平月廿九日 第百三十五版
大正五年平月廿九日 第百三十六版
大正五年平月廿九日 第百三十七版
大正五年平月廿九日 第百三十八版
大正五年平月廿九日 第百三十九版
大正五年平月廿九日 第百四十版
大正五年平月廿九日 第百四十一版
大正五年平月廿九日 第百四十二版
大正五年平月廿九日 第百四十三版
大正五年平月廿九日 第百四十四版
大正五年平月廿九日 第百四十五版
大正五年平月廿九日 第百四十六版
大正五年平月廿九日 第百四十七版
大正五年平月廿九日 第百四十八版
大正五年平月廿九日 第百四十九版
大正五年平月廿九日 第百五十版
大正五年平月廿九日 第百五十一版
大正五年平月廿九日 第百五十二版
大正五年平月廿九日 第百五十三版
大正五年平月廿九日 第百五十四版
大正五年平月廿九日 第百五十五版
大正五年平月廿九日 第百五十六版
大正五年平月廿九日 第百五十七版
大正五年平月廿九日 第百五十八版
大正五年平月廿九日 第百五十九版
大正五年平月廿九日 第百六十版
大正五年平月廿九日 第百六十一版
大正五年平月廿九日 第百六十二版
大正五年平月廿九日 第百六十三版
大正五年平月廿九日 第百六十四版
大正五年平月廿九日 第百六十五版
大正五年平月廿九日 第百六十六版
大正五年平月廿九日 第百六十七版
大正五年平月廿九日 第百六十八版
大正五年平月廿九日 第百六十九版
大正五年平月廿九日 第百七十版
大正五年平月廿九日 第百七十一版
大正五年平月廿九日 第百七十二版
大正五年平月廿九日 第百七十三版
大正五年平月廿九日 第百七十四版
大正五年平月廿九日 第百七十五版
大正五年平月廿九日 第百七十六版
大正五年平月廿九日 第百七十七版
大正五年平月廿九日 第百七十八版
大正五年平月廿九日 第百七十九版
大正五年平月廿九日 第百八十版
大正五年平月廿九日 第百八十一版
大正五年平月廿九日 第百八十二版
大正五年平月廿九日 第百八十三版
大正五年平月廿九日 第百八十四版
大正五年平月廿九日 第百八十五版
大正五年平月廿九日 第百八十六版
大正五年平月廿九日 第百八十七版
大正五年平月廿九日 第百八十八版
大正五年平月廿九日 第百八十九版
大正五年平月廿九日 第百九十版
大正五年平月廿九日 第百九十一版
大正五年平月廿九日 第百九十二版
大正五年平月廿九日 第百九十三版
大正五年平月廿九日 第百九十四版
大正五年平月廿九日 第百九十五版
大正五年平月廿九日 第百九十六版
大正五年平月廿九日 第百九十七版
大正五年平月廿九日 第百九十八版
大正五年平月廿九日 第百九十九版
大正五年平月廿九日 第二百版

發行所 株式會社 培風館
東京市小石川区宮下町
電話 小石川一〇二六番
振替 東京三二六一番

『牛』の著者　岡本米藏君著

竹內栖鳳畫伯裝畫
竹內栖鳳畫伯挿畫
桑田春風先生作歌
田村虎藏先生作曲

管笛

第三十版

四六判三二〇頁
絹裝幀函入
定價金壹圓半
郵稅金八錢

『牛』の姉妹篇なり。著者の卓越せる識見と雄大なる人格は、益々圓熟せる著者一流の筆致と相俟つて、論文に、感想に、寓話に、到處金玉の響きを發す。『牛』と共に當今隨筆中の双璧たり。

若溪會評

著者が旅行讀書等の間に得たる所を整理して蔵めたる意味より此名を附すと云ふ。題材多面、文章簡潔、意味深長、同氏の前著『牛』と類する書、表裝用紙挿畫其他凡て高尚入念中學上級以上に修養書として薦む。

前文部大臣伯爵　樺山資記公題辭
前文部大臣　尾崎行雄君題辭
前東京商業會議所會頭　男爵　澁澤榮一君題辭
神戸商業學校長　川崎芳太郎先生序文
神戸商業學校生徒　岡本米藏君著

賜台覽

修學行商日記

第十八版

定價金五十錢
郵稅金八錢

著者若冠苦學の資を得んとて日本全國を行商行脚す。此可憐なる日記は實に當時の著者が汗と涙の活ける立志錄なり。誠實眞率の氣紙面に溢る。

大阪朝日新聞評

神戸商業學校生徒たりし岡本米藏氏數年來各地に小間物を行商し得る所を擧げて修學旅行の資となし南清地方にまで其健脚を伸ばし其間耳目の觸るゝ所を巨細漏さず記し留めて此冊子を成し樺山伯等の題辭を冠して既に東宮御覽の榮を蒙れりといふ。

伯爵 副島種臣公題
ドクトルオブシビルロー 樺山資英君序
東京高等商業學校生徒 岡本米藏君著

商工界の七十日

第五版 定價金七拾錢
郵税金八錢

著者、東京高等商業學校在學中、暑中休暇を利用し、鐵脚克く關東、關西、東北、北海、北陸の諸地方を遍歷し、到る處、工場、商店に名士紳商を訪ね、普く各地の實況を探究し、眼に映ぜし事實を粉飾せず、忌憚なく記述し、以て天眞爛熳たる自家の面目を發揮せしもの即ち本書也。書中讀みて、喜ぶべきことあり、悲むべきことあり、笑ふべきことあり、但又怒るべきことも少なからず。故にその緒言に曰く『世の文人雅客の旅し給ふところ、山にあらざれば水なり、この故に紀行も亦自ら風流なり。われの歩きしところ、物質界なり、この故に從ふて此書また俗なり、見ん人その心だにし給はば腹もたつまじ』と以てその一端を知るを得べし。

紐育土地建物株式會社長 岡本米藏君著

紐育市内外の地所

第五版 定價金壹圓貳拾錢
郵税金八錢

本書は、紐育土地建物株式會社社長なる著者が、凡そ八年間、紐育市内外の土地に關して研究したる事實を有りのまゝに叙述せるものなり。本書の記する所は、其名の示すが如く、主として紐育市内外の地所に關するとなれども、人生と土地との關係及び都市の發達と其附近の土地との關係を最も明確に記するものなり。單に紐育附近の土地のみならず、人間の生活と土地との關係を知らんとする者は、本書を讀まざるべからず。土地は經濟上の最大要素なり。土地を離れて人間の生活は存在せず。本書は土地の研究に關する最良書なり

岡本米藏君原作
湯淺半月先生作歌
米野鹿之助先生作曲

文部省検定濟

唱歌

海外雄飛

作者自ら先づ海外に雄飛して後著くその思想の鼓吹につとめ、今やその熱誠溢れて歌となる、本書即ちこれなり。小學校をはじめ各中等諸學校の良教科書といふべし。

第四版

定價金拾錢
郵税十五部迄金貳錢
十五部以上郵税不要
百部以上定價一割引

岡本米藏君原作
桑田春風先生作歌
田村虎藏先生作曲

文部省検定濟

唱歌

ほゝ笑めく

ほゝ笑め、ほゝ笑め、につこりほゝ笑めとは作者が處世上金科玉條とする所、げにこの歌をきゝてほゝ笑まざるものあらんや、學校の生徒も、家庭の人も共に歌ひてほゝ笑めく。

第二版

定價金拾錢
郵税十五部迄金貳錢
十五部以上郵税不要
百部以上定價一割引

岡本米藏君原作
桑田春風先生作歌
田村虎藏先生作曲

文部省検定出願中

唱歌

母の聲

花鳥風月の樂みも慈母の歡聲を聞くの樂みに比すべくもあらず。人誰れか母なからん、宜しく速かにこの歌を歌つて慈母のみこゝろをききその溢るるが如き愛情を味ふべきなり。

第二版

定價金拾錢
郵税十五部迄金貳錢
十五部以上郵税不要
百部以上定價一割引

60
60

360
164

終